

二〇二三年一月一四日

ローカル線窓辺に眩し雪景色
幾度も雪の窓開け子規思ふ
姫を舞ふ神楽の人の喉仏
行間にふるさと匂ふ寒見舞
どこまでも雪吹き込めるシャッター街
形見なるセーターまくり皿洗ひ
農小屋の前は浄土やほとけのざ

二〇二三年一月一三日

ストーブを背に荷を下ろす行商婦
左義長の火柱となり空焦がす
むささびの星を抱へて溪渡る
顎上げて投葉と呑む寒の水
ありたけの酒積みていざ初漁へ
突風に舞ひ落ちて来し寒雀

二〇二三年一月一二日

やはらかき手首を持ちて筆始
風花やひざ掛け紅き人力車
男には頼らぬ鏡開きかな
更くる夜の家を揺るがすしづり雪
船追うて鳶の去りゆく松納
気に入りて持ち帰りたる初神籤

二〇二三年一月一日

雪残る橋な滑りそ初詣
両の手に雪玉持つて登校す
鰯引いて仕事始めの手鉤かな
たつぷりと小豆を炊いて鏡割り
練りきりの虎と目の合ふ初茶湯
校庭の隅まで伸びし冬木影
対局の袴凛々しく年新た
笛鳴らす警官もまた新成人

智恵子

うつき

みきお

凡士

素秀

むべ

あひる

凡士

みきお

素秀

たか子

ひのと

みきえ

むべ

凡士

ひのと

みきお

ひのと

たか子

こすもす

ひのと

ひのと

みきえ

むべ

あひる

せいじ

素秀

二〇二三年一月一〇日

初句会なれど目当ては飛鳥鍋
深酒や船出せぬ日の古炬燵
読初の聖書ふたりで開きけり
だみ声を残して翔ちぬ寒鴉
福寿草咲ひて日常回りだす
譲らるる席に一札着膨れて
煮凝や父の認知のふと戻り
稽古着のままの一団初詣

二〇二三年一月九日

放水の的撃ち抜きし出初式
亡夫在さば金婚の筈家の春
百寿なる松の下なる歌はじめ
冬耕の手を振りくれし牟寿翁
成人の日の島ぢゆうが母のかほ
兜煮の目玉いたたく松の内

二〇二三年一月八日

弾初や松脂弓にすべらせて
不機嫌を隠して母はくず湯吹く
伸びやかな鳶の笛降る初御空
凍雲の切れ目に白し伊吹山
初髪を解けば火の粉の匂ひたつ
偕老の肩寄せあひて日向ぼこ
着脱に十指もつるる寒の朝
やれ嬉し孫より声の年賀状
寒の水喉にするりと常備薬

明日香

ひのと

せいじ

ぼんこ

みづき

うつき

むべ

こすもす

凡士

豊実

こすもす

ひのと

うつき

ひのと

宏虎

むべ

素秀

やよい

隆松

ひのと

明日香

たか子

みきえ

満天

毎日句会みぬる選・二〇二三年一月一六日